

<早稲田の本棚から>

『武侠世界』創刊号—日本SFの祖・押川春浪と、学生野球の父・飛田穂洲
(興文社、明治45(1912)年、請求記号：雑誌貴重書ブロック サラ642 1)

長谷川 敦史 (戸山図書館担当課長)

2019年に放送されたNHK大河ドラマ『いだてん』の視聴者で、この番組に登場した「天狗倶楽部」に強烈な印象を覚えた方は多かったのではないだろうか。この謎の集団は正月早々の初回からテレビの画面に華々しく登場し、T・N・Gというロゴをつけたそろいのユニフォームを着て「てんぐ! てんぐ!」という掛け声¹⁾を大声で唱和、もろ肌脱いで一斉に踊り出すとともにスポーツ愛を全身で表現していた。そのあまりの破天荒にしてバンカラな様に、脚本を担当した宮藤官九郎の行き過ぎた創作ではないか、と思いかけたところで、実在の集団であるとの事実が語られ、視聴者は二重に驚きを覚えただろう。今回、早稲田の本棚から、この天狗倶楽部の面々が主な執筆陣となった『武侠世界』という雑誌を、押川春浪、そして飛田穂洲の関わりとともにご紹介したい。

『武侠世界』は1912(明治45)年1月に創刊された、青少年向けの雑誌である。主筆の押川春浪(本名・方存、1876～1914)は戦前人気を博した冒険小説作家であり、東京専門学校在学中の1900(明治33)年に処女作『海底軍艦』を上梓した。横田順弥、会津信吾はこの作品を日本SF小説の祖として評価しており²⁾、同じく早稲田大学出身でやはり日本SFの草分けとされる海野十三もまた、科学小説史上、押川春浪の名は落とせないと評価している³⁾。『海底軍艦』以後、押川は冒険小説を次々に発表して青少年の絶大な支持を得ることとなった。例えば、柳田泉、木村毅などの明治文学研究者は押川作品の愛読者であったと述懐しており、柳田は、(日露戦争後の日本では)「一面では勿論自然主義文学が文壇を代表しているが、その一面に又、春浪などの文学が一代を風靡していたのだということを忘れてはならない。こういう半面を忘れたら完全な文学史が書けないであろう。大衆社会の読書趣味、そういうものが、国民思想、社会思潮を知るに大に必要である」と述べている⁴⁾。1904(明治37)年、春浪は巖谷小波の紹介によって博文館に入社、『日露戦争写真画報』編集、『写真画報』主筆を経て、1908(明治41)年から『冒険世界』主筆となる。押川の人気によって『冒険世界』もまた青少年から多大な支持を得たが、1911(明治44)年に春浪は博文館と『冒険世界』を去って『武侠世界』を創刊することとなる。

春浪の5歳下の弟、押川清は早稲田大学野球部三代目主将を務め、日本初の野球渡米チームにも選出された名選手である⁵⁾。春浪も若い頃から野球に親しんでいたが、『冒険世界』創刊前後より、様々なジャンルのスポー



『武侠世界』創刊号表紙

ツ振興に情熱を傾けていくようになる。1909(明治42)年、春浪は京浜電気鉄道(現在の京浜急行電鉄)に勤めていた作家の中沢臨川と計って同社に交渉し、1万坪の「羽田運動場」を新設させることに成功する。このグラウンドでは学生野球、学生相撲、文士相撲などが開催さ

れ、また、『いだてん』にも描かれたように、ストックホルムオリンピック予選会場となって、当時の日本で未発達であった陸上競技の発展に大きく貢献している。

この羽田運動場開設に伴い、私的なスポーツ社交団体として春浪と臨川を中心に結成したのが「天狗倶楽部」である。押川春浪、中沢臨川、押川清の他、吉岡信敬、橋戸頑鉄(信)、河野安通志、三島弥彦、前田光世(コンデ・コマ)、水谷竹紫、阿武天風、児玉花外、弓館小鱈、河岡潮風⁶⁾、などがメンバーに名を連ね、とにかく破天荒な団体であった。例えば、天狗倶楽部と武侠世界社が主催した第二回学生相撲大会では、取組終了後、「大鍋で煮た豚汁を手掴みで食い乍ら四斗樽を控えて痛飲」「天風君が真の裸踊をやる、飛田君が又相撲を取出して前歯を折る、吉岡君が転んで豚鍋に足を突込む⁷⁾」という様子が伝えられている。『いだてん』の描写が決して過剰演出でも誇張でもないことが分かるだろう。

1911年に雑誌『武侠世界』が成立した背景には、東京朝日新聞が同年に展開した、いわゆる「野球害毒論」がある。当時隆盛を極めていた学生野球を批判するこの連載に対して、押川春浪は早稲田大学野球部初代部長・安部磯雄らとともに読売新聞紙上で論戦を張った⁸⁾。結果は押川らに軍配が上がったものの、『冒険世界』誌上で文章掲載に博文館が難色を示し、これを不満とした押川は博文館を退社、武侠世界社を設立し、興文社を発行元として『武侠世界』を創刊することとなった。

早稲田大学中央図書館には、『武侠世界』の原本が二十数冊所蔵されており、その中には創刊号が含まれているが、国内の創刊号所蔵機関は少ない⁹⁾。大衆雑誌が

研究資料として大学図書館の収蔵に至るには、後年の寄贈受入などに依るところが大きい、この時、自館の蔵書構成を理解している図書館員の存在が不可欠である。中央図書館に遺された『武俠世界』は、書架狭隘化に直面する現在の我々にとって、一つの教訓としても、その存在感を示していると言えるだろう。さて、創刊号を見ると、表紙上部には「主筆 押川春浪」とともに「絵画小杉未醒」と大きく記載されているが、小杉未醒（放庵）もまた天狗倶楽部のメンバーであり、後年『武俠世界』の編集にも携わった¹⁰⁾。目次を見ると、記者による奇談・英雄談などの他、押川の小説「空中夜叉」、吉岡信敬の「早慶戦紛争回顧録」などが並ぶ。そのほか、前田光世、佐竹信四郎、平井晩村などが記名で文章を寄せている。『武俠世界』については、平井晩村が時代小説発表の場としたことや、村山槐多の怪奇小説三篇の初出誌であることも、特筆すべきだろう¹¹⁾。

飛田徳洲（本名・忠順、1886～1965）と押川春浪との繋がり、飛田が早稲田大学に入学する1907（明治40）年に遡る。飛田は水戸からの上京に際して父親の反対を受けたが、そこで飛田の保証人になって早稲田大学入学を実現させたのが押川春浪であった。入学した飛田は野球部に入部、のちに第五代主将となる。そして1913（大正2）年に早稲田を卒業した飛田は、針重敬喜とともに武俠世界社に入社した。針重は飛田が早稲田に入学したときの下宿相部屋の関係である。

飛田、針重が入社した頃、押川は長年の度を越した飲酒の害によって急激に体調を崩しつつあった。そのため、『武俠世界』は、その初期の頃から、実質的な編集が飛田と針重によって担われている。1914（大正3）年、押川春浪は病気療養のため小笠原に移住するが、1か月ほどで帰京。そして、同年11月、38歳の短い生涯を閉じた。『武俠世界』は大正3年12月号巻末に「痛恨哀悼辞」を掲出し、大正4年2月号を春浪追悼文集とした。1925（大正14）年には、天狗倶楽部一同によって、早稲田大学にほど近い雑司ヶ谷霊園に「春浪天狗碑」が建立されている。飛田は、死の直前に押川から受けた「最後の教訓」として、以下の言葉を書き記している。「人間は、頭ばかり発達したってだめだよ。（中略）貴公は、みずからも運動家をもって任じているのだから。（中略）早稲田に行って、ウンと野球でもやれ」「貴様なんかは、へボな原稿を書くよりも、運動のために苦勞するのがほんとうなんだ。実はおれも、いまさら後悔しているんだ」¹²⁾。押川没後、飛田は1918（大正7）年に読売新聞社に入社するまで『武俠世界』編集に携わり、『武俠世界』を離れた翌年、早稲田大学野球部初代監督に就任した。1925年には、19年間途絶えていた早慶戦を復活させ、監督退任後も、高校野球、大学野球の論評に筆を振るうとともに、「最後の早慶戦」開催などに尽力、戦後は日本学生

野球協会創設に携わって「学生野球の父」と呼ばれた。

早稲田大学野球部のグラウンドとして1902年に設立された「戸塚球場」はのちに安部磯雄の名を冠して「安部球場」と名を改め、1987年にその長い歴史を閉じて東伏見に移転した。跡地には早稲田大学総合学術情報センターが建設され、1991年には、この中に中央図書館が開館している。中庭には、安部磯雄、飛田徳洲の胸像が立ち、この場所が野球部グラウンドであったことを伝えているが、その目線の先にある中央図書館には、押川春浪、飛田徳洲らが心血を注いだ『武俠世界』が所蔵され、彼らの往時の文筆活動の跡を伝えている。

注

- 1) 正確には「テング、テング、テンテング、テテンノグー。奮え、奮え、天狗！」である。
- 2) 横田順弥、会津信吾『快男児押川春浪—日本SFの祖』（パンリサーチインスティテュート、1987）。戦後における押川春浪や天狗倶楽部の紹介は、同書の著者であるSF作家・横田順弥の功績が大きい。
- 3) 海野十三『『地球盗難』の作者の言葉』（『海野十三全集 別巻1 評論・ノンフィクション』三一書房、1991所収）
- 4) 柳田泉「虚白堂文学雑記」（東洋文庫『随筆明治文学 3 人物篇・叢話篇』平凡社、2005所収）。柳田の指摘は、大衆文学と純文学という単純な構図ではなく、冒険小説と青少年の国威発揚の関係という問題を孕んでいる。これに対しては、早くは1980年代に池田浩士による論考があり、近年になって鈴木康史、武田悠希らによる研究が行われている（以下参照）。
 (1) 池田浩士『大衆小説の世界と反世界』（現代書館、1983年）、
 (2) 鈴木康史「押川春浪の『武俠六部作』の構造と読者共同体 —『冒険世界』に参加する読者たちと媒介者としての春浪—」（『奈良女子大学文学部研究教育年報』9号、p.19-34、2012年）、
 (3) 武田悠希『世紀転換期の出版文化と押川春浪—冒険小説の生成と受容』（博士学位論文、立命館大学（文学）、2018年）
- 5) 押川春浪、押川清の父親は、東北学院大学の創設者・押川方義であり、早稲田大学の創設者・大隈重信とは様々な面で親交があった。早稲田大学中央図書館が所蔵する大隈文書には、押川方義から大隈重信に宛てた書簡が複数残されている。
- 6) 天狗倶楽部の詳細は横田順弥氏『『天狗倶楽部』快傑伝 元氣と正義の男たち』（朝日新聞出版、2019）等をご参照頂きたい。
- 7) 『快男児押川春浪—日本SFの祖』（前掲）
- 8) 読売新聞以外にも、天狗倶楽部主催で「野球問題演説会」を開催。また、安部磯雄と押川春浪は『野球と学生』（廣文堂書店、1911年）という共著を出版した。
- 9) インターネット上の蔵書目録で創刊号の所蔵が確認できるのは、日本近代文学館、神奈川近代文学館、國學院大学図書館、奈良女子大学（研究室所蔵）で、本学を加えて5機関のみである。創刊号以外であれば他にも所蔵機関があるが、多くはない。なお、国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」で会津若松市立会津図書館と尾鷲市の中村山土井家文庫が所蔵する一部の巻号の表紙や目次を閲覧することができる。
- 10) 後の小杉洋行時には、倉田白羊が挿画を担当している。白羊もまた天狗倶楽部メンバーである。
- 11) 「殺人行者」「魔猿伝」「悪魔の舌」。いずれも1915（大正4）年発表。槐多は1914（大正3）年6月から1916（大正4）年春にかけて小杉未醒（放庵）宅に仮寓していた。時期からも、掲載には未醒の仲介があったと見て間違い無いだろう。
- 12) 飛田徳洲「春浪武勇伝」（『飛田徳洲選集 第1巻 野球生活の思い出』飛田徳洲選集刊行会、ベースボール・マガジン社、1960所収）